

[illegible]

今昔物語ふあんたじあ

杉本苑子

こ 子
杉 本 苑
すぎもと そのこ
あ ん た じ あ
こんじやくものがたり
今 昔 物 語 ふ

昭和四十七年一月十五日 第一刷

発行者 二 宮 信 親
発行所 読 売 新 聞 社

東京都中央区銀座三の二の二一 104
大阪市北区野崎町七七七 530
北九州市小倉区明和町一の一 802

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 協和製本株式会社
定 価 五 八 〇 円

©, Sonoko Sugimoto, 1972

0093—700880—8715

その腫物^{しゅもつ}は、丹波守・平貞盛の腰のうしろに、ぶきみな口をあけていた。

まわりは固く、紫色に腫^はれあがり、膿^{うみ}があふれ出て悪臭を放っている。

痛みがひどく、熱もあるらしい。日ごろ剛強を誇る荒武者の丹波守も、さすがに床の上にうつぶせに臥^ふし、枕をかかえて唸^{うな}り通しだった。

——ひと眼、見て、

「これは、容易ならぬご容体でござりますな」

医師の和気康元^{わけやすもと}は首をかしげた。

彼はまだ、若い。二十四歳にしかなくていない。治療の経験はあさく、むろん技法も、練達していると言いがたい。しかし、そんな康元にさえ、丹波守の腰部にとりついている腫れものが、命^{いのち}とりの悪瘡^{あくそう}であるとは判断できた。

「なんとかならぬか？ 助かる工夫はないか」

病人はうめく。髭づらは苦痛にゆがみ、眼は血走って、狂暴な風貌が、なおいつそう鬼の面のように見える。康元はふるえた。

「どうした。なおせるか？ なおせないのか？ はっきりしろッ」

襲いかからんばかりな丹波守の語気だ。医者を頼るのではなくて、威圧して従わせようとする傲慢な武人氣質の持ちぬしなのである。

「妙薬がないことはございません」

思わず、康元は言ってしまった。そしてあわてて、口をおさえたが遅かった。

「なに、効く薬があると？」

「は、はい」

「なんという薬だ」

「児肝と申します」

「児肝!？」

病床から、丹波守は半身をのり出し、

「申せ康元ッ、その薬、どこで売っている？ どうすれば手にはいる？」

身もだえて叫んだ。

「いや、児肝は売っている品ではありません。それだけにすこぶる入手しがたい秘薬でございます

す。お館さまのご威勢をもってしても、こればかりは……」

「ば、ばかなッ、わしの武力、財力をもってして、手に入れ難い品などあろうか。まして一命にかかわる靈藥、丹波一国はおろか、日本國中、草の根を分けても求め出してみせる。正体を言えッ、その藥の正体をッ」

のっぴきならなくなって、康元はうちあけた。

「兎肝とは、腹ごもりの赤兎の、肝のことでございます」

「なんだと？ 赤兎の肝？」

「それも、五カ月から八カ月までの……」

でためではなかった。亡き師から、どのような悪性の腫物も、兎肝さえ用いれば快癒すると、康元は教えられていたのであった。

「ふふ、ふふふふ」

腐肉のようなくちびるをひきつらせて、丹波守は笑い出した。

「もったいぶって申すゆえ、火ねずみの皮ごろも、蓬萊の玉の枝にも価する珍品かと氣をもんだが……、たかが胎児の肝ぐらい、なにほどのことがあるう。今夜ただいまにも、手に入れてみせるわ」

大声で、丹波守は召し使いをよび、息子の左衛門ノ尉維衡に病室までくるように命じた。

「お召しですか父上」

と、待つまもなく、左衛門ノ尉ははいってきた。これも眼つきのギョロリといかつい、父におとらず性急残忍な武将である。

「おお維衡か。ほかでもない。そちの妻は、身重とかいったな」

「はあ。懐妊中です」

「女房の命、その腹の子ごとわしにくれい」

「な、なんと仰せられます？」

唐突な申し出に、左衛門ノ尉は眼をむき、父の口もとを注視した。

「胎児の肝は、瘡の妙薬だそうだ。康元がそう申した。ぜひくれい」

カッと、左衛門ノ尉の面上に血の色がたぎった。

「無法な！　いかに父上のお求めとて、みごもった妻ばかりか、腹の子までを……」

「ええい、つべこべ逆らうなッ」

丹波守は大喝し、それが腫れものに響いたのか、はげしく眉をしかめた。

「女など、いくらでも新しいのを持てばよい。子もまた、孕ませることができようが、親はかけがえないのだぞッ、天にも地にも一人しかない父の命と、妻や子の、どちらが大事か、くらべるまでもないことだッ」

言い出したら、あとにひかない父の気性に、左衛門ノ尉は沈黙し、恨みに燃える眼で、医師の康

元をにらんだ。

康元は青くなった。結局、泣きねいりさせられて、左衛門ノ尉は妻を提供することになるだろう。しかしそのあと、自分を生かしてはおくまい……そう思うと、眼の前がまっ暗になるほどの絶望におそわれた。

（兎肝の話などしなければよかった。なんとかこの災難を、切りぬける方法はないものか）
死にもの狂いで康元は考えた。

（……そうだ！）

とっさに、名案がひらめいた。

「申しあげますッ、お館さま。維衡さまもお聞きくださいませッ」
病父とその息子のあいだへ、若い医師は、いそいで割ってはいった。

2

「たしかに兎肝は悪瘡に効きます。それはまちがいございません。ただし、病人と血のつながっている胎児では、薬効はないのでございます」

われながらうまい言いぬけが、すらすら口をついて出た。

「維衡さまのお子ならば、まさしくお館には直系のおん孫……。あかの他人の孕み児でなければ……」

丹波守の表情から、みるみる氣負いが消え、あべこべに左衛門ノ尉の顔面には、おさえようもない喜悅の色がうかびあがった。

「それを早く申さぬか、それを……」

にがりきる父を、左衛門ノ尉は口ばやになぐさめて言った。

「残念なことです。しかし、ご安心ください。代わりの胎児は、わたくしがかならずさがしてきますから……」

「見つかるだろうか」

「このひろい領内に、妊婦のひとり二人、いないことはありませんすまい。あすとはいわず今夜のうちにも、きっと取ってまいります」

勇んで、左衛門ノ尉は出ていったが、その豪語どおり、二刻にもならないうちに、意氣ようようとひきあげてきた。

「父上ッ、まんまとせしめてまいりましたぞ」

病室へ足をふみ入れるなり、小わきにかかえていた壺を、丹波守の枕もととへドカッと置いた。

「村々をしらみつぶしに当たってみようと思つていたところが、あんがい早く、国府の町の南の

はずれで孕み女を見つけました。で、さっそく出向いて、国庁からの召しだといつわり、人通りのない藪かげへおびき出して一刀のもとに斬り殺したのです」

「何カ月になっていた？」

「わたくしの妻同様、六カ月の身重ということでした」

「死骸は始末したか？」

「見つかつてはあとがうるさいので、腹をたち割って子をとり出したあと、土中ふかく埋めてまいりました」

「部下はつれて行ったのか？」

「腹心の者、二人だけです」

「よし、よく口止めをしておけ」

そして、座敷のすみにちぢこまっている康元を、じろりと見かえり、

「さあ、尻ごみせずと、処置にかかれ」

丹波守は冷ややかに命じた。

「はい……はい」

邊巡はゆるされなかった。康元は肚をすえ、水干の袖をうしろで結んで、屏風囲いの内側へいざり入った。

用意の板の上へ、壺の中味をこわごわあける……。

(なむあみだぶ、なむあみだぶ)

一心に成仏を念じながら、もうすっかり人間のかたちをととのえている小さな肉塊に小刀を入れて、肝の臓をとり出した。

丹砂なんしゃと鬱金末うこんまつを加えて乳鉢でよくよくすりつぶし、布に伸ばして患部に貼りつける。

「ううむ。気のせいかな、つけたとたんに何やら痛みが軽くなったようにおぼえるぞ」

丹波守は声をあげ、

「おどろくべき薬効ですな」

左衛門ノ尉もふしぎそうに父の腰のうしろをのぞきこんだ。

やがて軒いひきをかいて、丹波守は眠りはじめた。ここ五、六日苦痛に責められてろくろく瞼まぶたも合わなかった疲れが、一時に出たのだらう。……見とどけて、別室にさがろうとする康元の背へ、

「さて、——さて康元」

声をかけてきたのは左衛門ノ尉だった。

「きさま、おれの急場を救うつもりで、血縁の兎肝は効かぬと申したのだらう」

康元はうなずいた。左衛門ノ尉は、ニヤリと笑って言った。

「よくぞ智慧をはたらかせてくれた。おかげで女房子が助かった。礼をいうぞ」

「とんでもない。ご会釈など無用でござります」

「この借りはかならず返す。待っていろ」

「いえ、借りなどとおっしゃるほどのことではござりませぬ。それよりも薬のききめが現われた今、もはや私を家に帰らせていただきとうぞんじます」

「それはだめだ。父上が承知すまい。まあいましばらく邸にとどまって、看護をつづけてやってくれ」

うんざりした。用があつて、都へのぼうろうとしていた仕度さいちゅう、他の、どの医者にもサジをなげられた丹波守に康元はよびつけられ、むりやり治療させられたのである。

（旅立ちも当分は見合わせか）

あてがわれた宿直部屋へひきとつて、その夜は寝た。

さいわい、だが、丹波守の病状は一日ごとに快方に向かい、兎肝を用いて十日目には、床の上に起きあがるまでになった。

やっと、康元は解放された。

「ごくろうだった。帰宅してもよいぞ」

日ごろ吝嗇で有名な丹波守だが、命びろいできたのが、さすがにうれしかったのだろう、栗毛の鞍置き馬を一匹、それに砂金をひと袋そえて、はなむけにくれた。

康元は、いそいそ家へもどった。

彼はまだ、独り身である。傭人やとの老爺ろうやと二人きりでくらしている。

「おい、帰ったよ、あけてくれじいさん」

表戸をどどん叩いた。

「あ、おかえりなさいませ」

かすかな返事が聞こえ、老爺が立ってきて戸の掛け金はずした。

「どうも、えらい目にあった。国司の館にとじこめられてしまったね」

そのかわり、こんな仰々しい引き出物をもらった。厩うまやがあるわけでなし、しかたがないから水屋の土間にでもつないでおいてくれ……そう言って、馬の手綱を爺やにわたし、康元は奥へ通った。

ひさしぶりに居間の円座にくつろいで、ふところから砂金の袋をとり出し、

「さてと……。都へのぼったら、これで何を買おうかな」

たのしく思いめぐらしているところへ、

「さぞ、お疲れでございましたろう」

白湯さゆを椀わんにみたして、爺やが持ってきた。なにげなくその顔へ眼を向けて、

「どうしたんだねじいさん。おれの留守中に、病氣でもしたか？」

康元は声をつつぬかせた。老人の顔色はそれほど悪く、しばらく見ないまにやつれはてて、実際

の年よりさらに十も、老^おけてしまっていたのである。

3

主人に問いかけて、

「いえいえ、病気でありませんぬ」

爺やは骨ばった両手で顔を覆い、がまんを切らしたように嗚咽^{わうげん}し出した。

「病気でございませんが、いっそ、重い病にでもかかって、死んでしまいたいとございます」

「なにかあったのか？ 悲しいことが……」

「娘が殺されました。国庁の使いといつわって、侍すがたの男が二、三人やってき、うむもいわずつれ出したそうでございます」

ついしらず、康元は口走った。

「じいさん、お前の娘は、みごもってはいなかったか？」

「六カ月の身重でした。それっきり帰ってこないで婿が案じてさがしましたところ、むざんや、腹をたち割られ、藪の片かげに埋められていたそうでございます」

なぐさめの言葉も出なかった。ただ全身で、康元は戦慄^{せんりつ}した。老人のこの悲嘆は、自分が招いた

ものである。左衛門ノ尉の妻でもよかったのに、彼の怒りを恐れるあまり口から出まかせの思いつきを言って、保身をはかった。その結果、罪もない町女房と腹の子が殺され、夫や父親をなげきのどん底につき落としてしまったのだ……。

（すまぬ！ かんになしてくれ！）

慚愧に、灼きたてられる思いであつた。

「いったいだれが、なんのためにあのようなむごいことをしたのでしょうか」

泣きしずみながらも、老人はきれぎれに疑いを口にした。康元にはしかし、真相をうちあけ、老人に向かって許しを乞う勇氣はなかった。

「親思いの娘でございました。婿も気持ちのやさしい男で、私を引きとり、養ってくれるとたびたび申していたのですが、どちらも劣らぬ貧乏ぐらし……。ましておっつけ嬰兒も生まれることですし、やがて一つ世帯になるのをたのしみに、働けるうちは働こうと、こうしてこちらさまに、私は奉公していたわけでございます」

「……それで、葬りのことや何かは？」

かろうじて、康元はたずねた。

「お留守のあいだに、すっかりすませました。婿は、気がぬけたようになってしまい、稼ぎの仕事も手につかぬありさま……。私ももう、この上、生きてゆく張りをなくしました」

表の戸が、がたがた鳴り、

「康元、いないか？ おれだ」

近所の耳をはばかりように、このとき、よびたてる声が聞こえた。

そそくさと康元は外へ出てみた。星空を背に、左衛門ノ尉維衡が立っていた。

「おぬし、京へのぼるとかいつていたな」

小声で、左衛門ノ尉はきり出した。

「はい。二、三日中にも旅立とうかと考えております」

「供はつれてゆくか？」

老爺しかいなかった。こんどのこの状態では、むりかとも危ぶんだが、いちおう、

「つれてゆくつもりでございます」。

と、康元は答えた。

「ならば一言、告げておく。老^{おい}坂の峠にかかったら、そのほうは馬からおり、供の者を馬に乗せろ」

「なぜでございます？」

「父上は、おぬしの射殺を家来に命じた。領民を殺し、その腹の子を治療に用いたことが万一、おぬしの口から都びとのあいだに知れ渡ったら、これはうまくなからなあ。口をふさいでしまおう

と考えたにちがいない」

怒りが、身体の芯しんをつらぬいた。

「あんまりですッ。それは無慈悲というものだッ」

左衛門ノ尉はせせら笑った。

「なあに、父上の気性とすれば、ごく当たり前な思いつきさ。だが、おれはおぬしに借りがある。だからこっそり知らせにきたのだ。よいか。命が大事だと思ったたら峠路では馬に乗るな。馬上の者目がけて射手は矢を放つ手はずになっている。まちがえるなよ」

ささやき捨てるといなや、身をひるがえして去ってしまった。

三日目の朝、和氣康元は爺やをつれて、丹波の国府をあとにした。

彼は決意を固めていた。老人一家の悲劇は、彼の口から起こったのだ。償つぐないは、しなくてはならない。天の咎とがめがもしあるならば、それは自分が受くべきものだ……そう、覚悟をきめていた。

老ノ坂の峠路に、いよいよよかり出すと、しかし、康元の決意はくずれはじめた。死への恐怖が、理性をねじふせるのだ。彼は喘あえいだ。肌着はだぎがぐっしよりするほど、全身に油汗が吹き出てきた。

（いま矢がくるか？ 射かけられるか？）